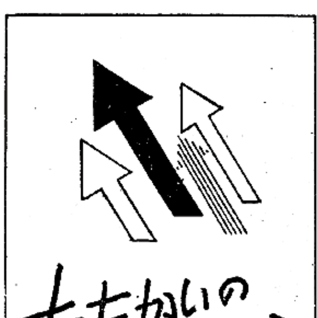

たたかいのなかから

〈投稿歓迎〉

このページは各地の運動、闘争報告、論争、本紙への批判を含む雑感など、読者のページとしてお使い下さい。投稿を大歓迎します。匿名希望の方は、その旨はっきり明記するか、あらかじめペンネームでお寄せ下さい。特別の場合を除いて原稿は極力短く（五〇〇字前後）お願いします。できるだけ全文を掲載しますが、紙面の都合上カットせざるを得ない場合もあります。あらかじめ御了解下さい。〈「闘いの中から」係〉

爆弾闘争の再発に思う

大阪　K・Y生

釜ケ崎で「爆弾」事件のための予防弾圧が行なわれた。当初、警察の悪質なデッチあげだと思った。しかし、主義主張をもった「党派」の戦術らしいと判ったとき、バカなことをすると思った。「爆弾」によって破壊したり、守り切らなければならないことが釜ケ崎の闘争にあるのだろうか。騒ぎを起こしその主体が「自派」であることを目指したいという助平心があったように思える。「自派」が「爆弾」によって釜ケ崎労働者の解放へと導いていきたいという思い上りがあるように思える。釜ケ崎の日常的な地道な団結への闘争の積み重ねに「じれったさ」を感じ、なんとか流動化させたいという短絡したあせりが感じられる。結局、労働者人民につき合いかねるということにならないのか。そのことは結局、敵を利し味方を分断させてゆくことに利用されてしまうことになるのではないだろうか。

気持はわかる、という私達の弱さも克服しなければならないと思う。心情的には好きだ、命を張っているのだから、とここ数年色々なことを自らに許してきたように思う。自らが大したことをやっていないというコンプレックスがそうさせてきたのだ。この点も克服しなければならない。敵を自らの命をかけて殺すということを知らず知らずに最上の価値みたいにどこかで思っていたのではないか。主観主義・観念的ではなかったか。階級的自信、労働者人民と共に闘うということが余りにもなかった結果ではなかったか。かっての新左翼は一体何を「新」たらしくしてきたろうか。「旧左翼」の悪い所ばかりが「新左翼」にみえるのは私だけのことだろうか。誤りかもしれないが「新左翼」の延長で何かをやれば、それは全て裏目に出るという情勢のように思える。小手先の転換ではなく、価値観の大きな転換が急務なのではないか。

闘争便り

「燕よ、お前はなぜ来ないのだ」を観劇して

観劇しながら、演じる人達は金芝河の芸術と民族解放の思想との結合をどう考えているのかと、思った。米倉は「〈韓国からの通信〉自体すでに日韓知識人合作による所産です。私はそこへ演劇人とし参加することにより、日韓の民衆的連帯を強めたいと思います」と語った。私達が市民に対いして大声で叫びたいことを、この劇は直接的にするどく大胆に訴えている。これが演劇のもう一つの力だとすれば、これも一つの闘い方なのであろう。劇の最後に読みあげた金芝河のアピール「あなたたち日本人は常に私達が必死になって対しているものを必死で守ろうとするものをじゅうりんしている。あなたたちは今、その事態を逆転させる果敢な道徳的決断を下すべきでありましょう」が、我々にとどめを刺した。

（鎮悪鬼通信　No.8より）

集会案内

9・22動労千葉支援全関西大集会

9月22日（木）午後5時半～

「8・12大集会」を出発点に、「ジェット燃料貨物輸送阻止」を全国的に拡げるため、この関西の地で、三里塚芝山連合空港反対同盟の共催で集会を行う。

大阪中之島中央公会堂

主催／三里塚芝山連合空港反対同盟、三里塚決戦勝利百万人動員全関西実行委員会

パンフ紹介

生存をおびやかす原子力発電所

第1～5分冊

このパンフレットは、住民の漠然とした不安による反対を、事実と科学をふまえた確信のある反対にするためつくられ、多くの学者と各地での住民運動を進めている人々の援助を得ました。

〈第一分冊〉1「浜坂原子力発電所」の現状、3電力は必要か

〈第2分冊〉4放射線の人体への影響、6温排水の魚貝類海藻類への影響

〈第3分冊〉6原子力発電所は安全でない、7放射性廃棄物による日常汚染

〈第4分冊〉8住民を犠牲にした原子力発電所立地、9行政と電力会社の悪質なやり方、10原子力発電所によって地域は発展しない

発行／浜坂火力・原子力発電所設置反対町民協議会、兵庫県美方郡浜坂町地堂2丁目

7月会計報告

収入		支出	
前月残	76,542	印刷費	343,950
購読料	352,920	発送通信費	137,137
カンパ	223,000	活動費	102,057
定期カンパ	277,000	事務所費	202,698
雑収入	26,860	人件費	522,145
借入金	1,200,000	返済金	521,050
		貸付金	300,000
		翌月繰越	27,085
合計	2,156,122	合計	2,156,122

購読料前納、カンパに御協力下さい。

日本赤軍

持場で主体的な総括を

5・30声明への意見に応えて

日本の人民、同志、友人のみなさんへ。

元気で持ち場の任務をはたし、闘い抜いておられる事と思います。私たち日本赤軍の提起した5・30声明に対しての人民、同志、友人の皆さんからの批判や支持の声を聞き、私たちは大変うれしく思っています。そして多くの人民、同志、友人のみなさんから5・30声明へ意見をよせていただいた事により、更に私たち自身を検証していくことができました。私たちの手もとにとどいている限りの人民、同志、友人の皆さんからの意見に対して討議し、私たちの考えをここに提起していきたいと思います。

一、人間が同じなのか、ちがうのか？

私たちの前に両極端の意見があります。ひとつは人民新聞七月五日付の「大阪M支局での討論」の中の発言です。「ああいう人たちが自分らと同じことをいい始めたというので、自分の主張に自信が持てるような気がします」という意見です。もうひとつは六月十五日付の紙面の「一種の転向声明、東京T生」という投書のなかの「すばらしい社会主義を作ろうとするわれわれと彼ら（日本赤軍）とは根本的に人間がちがうのだと思います」という意見です。

前者は以前は違うと思っていたが今は同じだという人であり、後者は以前は同じだと思っていたが今はちがうと思っている人です。ここに私たちは今一度提起しなければならない根本的な問題があると考えます。それは人間観の問題です。世界観の問題であるともいえます。すなわち人間は同じだという事です。

かつて私たちは自分たちを「前衛」であるし、「武装闘争を先頭で担っている」として、自分たちが何かしら「えらくて、立派なのだ」という幻想を持っていました。そこで、自分たちの本当の姿を見ることができませんでした。

しかし、今、自分たちの言葉や形態の勇ましさを一枚、一枚はぎとってみると、その姿はえらくも立派でもない、誰とも同じ姿であることに気づきます。

前者の人は「えらくて、立派だ」という日本赤軍とはちがうと思い、立派でもない日本赤軍と同じであると気づいたのです。後者の人は「えらくて、立派な」日本赤軍と同じと思っていたが、えらくも立派でもない日本赤軍とはちがうと考えている人です。

私たちがマルクスレーニン主義の本を百冊読破し、ありあまる共産主義の知識をもっていても、最先頭で勇ましく銃を握っていようと、自らの生きていく姿そのもの、本音、欲望というものを意識的に改造しなければ、みんなが幸にくらせる社会をつくりだすことはできません。

めしを食う事が思想だといわれることがありますが、誰もが自然成長してきた思想をもっています。闘いのなかでそれは自然成長的な階級性となって、革命活動の中で実践されます。マルクスレーニン主義の洋服をぬいでみると、そこには自分の事だけしか考えない一人のブルジョアジーがいる事も、往々にしてあります。洋服ではない骨や血肉としての革命観を主体的な力にすることが問われています。それは立場の改造といえます。

革命は共産主義の知識の量や形態方法の問題ではなく、生きている人間そのものの問題です。人間がかわる、人間をかえることは、革命の根本の問題です。前衛性とは指導性とは何よりも、自分の本当の姿のブルジョア性と意識的に闘うことにあります。

誰もが同じであり、変りあえるという確信こそが、革命の確信です。だからこそあらゆる人民、同志、友人と手をたずさえて新しい社会を作っていけるのです。

二、団結をめざすことは自明の理、思想の問題である事は当り前なのか？

私たちのところに直接きた意見の中に「団結をめざす事は自明の理であり、思想の問題である事は前からわかっている。問題はそれからどうするかだ」というものがありました。私たちはこの意見には異議があります。これは「新左翼」と呼ばれる人々の一部に多い意見だと思います。

「団結は自明の理」「思想の問題である」といっている同志友人の実践をみると、自明の理でない事におどろきます。共産主義者を名のる以上、団結が必要だといわない人はいません。思想の問題である事もいわない人はいません。私たちはなぜ団結の問題、思想の問題をいうのかというと、その実践が理念と全くはなれているからにほかなりません。そしてそこに日本革命の敗北の根拠があると考えるからです。

団結、思想の問題といいながら分裂したり内ゲバをしたりするのは、一体何に根拠があるというのでしょうか。

団結は実践の問題です。なぜそれを実践しえないのかを問うたとき、実践の問題として、思想の問題は明確となります。団結へと向わない思想の問題のとらえ方は、実践としての思想ではなく、知識理念でしかない事は明らかです。

自分たちが資本主義社会のなかでつくられた立場、自然成長したその生き様を不断に変革しようとしない限り、団結は生みだせません。口先でいくらマルクスレーニン主義をいおうと、団結しえず分裂や内ゲバをくりかえすのは、その根拠に敵階級の思想を反映した立場があるからです。

階級的な立場、階級的な価値は一つです。階級の利益、人民の利益のために、自らの自然成長してきた階級性を変革していく事を通して、あらゆる人びとがその普遍的な価値の中にひとつになっていく事ができます。それが思想的な団結です。自らを絶対化したところからは、自らの姿に似せて世界をつくりかえる帝国主義者のやり方しかできません。そこから支配は生れても創造的主体的な団結は生れてはきません。

自分たちがえらくも立派でもないという真の姿をみつめ、それを団結にむけて改造していくことが必要です。謙虚で実際的な思想闘争を通して思想的な階級的な団結をつくりだしていくことができます。その中から初めて正しい革命路線をつくりだしていく事ができます。

三、日本赤軍は共産主義者同盟、赤軍派を再建しようとしているのか？

先にあげた「一種の転向声明」という投書のなかで更にこうかかれています。「共産主義者同盟が再建統一されるとしても、彼ら（日本赤軍）がその対象になることはないと思います」と、また七月五日付の紙面の「党的な立場で大胆な総括」という投書のなかで「日本赤軍とともに、赤軍派再建に向けて奮闘しよう」という事がかかれています。これも前者は反対する立場からのもので後者は支持する立場からのものです。私たちはどちらに対しても異議があります。

私たちは共産主義者同盟や赤軍派という党派の再建はめざしてはいません。あらゆる人民を結集しうる、階級性を党性とする真の指導主体をつくりだすことこそ、私たちがめざすものであると考えています。そのために共産主義者同盟、赤軍派に限らずあらゆる人々と党派的利益ではなく、階級の利益、人民の利益のために手をたずさえあっていこうと考えています。そのためにもし日本赤軍という組織名や党籍が邪魔になるとすれば、私たちはすぐにでもより階級の利益人民の利益のためになるようにかえていくでしょう。

過去の遺産にしがみついていては何もなりません。古い党の利益、党派性そのものを解体し、階級性を党性とする指導主体の創出にむけて不断に自己改造していくことが大切だと考えています。言葉が勇ましく「革命的」であっても、行動がともなわなければ意味がありません。行動が革命的で言葉が一般的である事の方が、革命活動に必要です。

四、支持するか、反対するか？

私たちの声明に対して様々な立場から支持、反対の意見が出されています。私たちは支持、反対からはじまると思いますが、しかしそこから一歩すすめて考える必要があると考えています。なぜかというと現在、私たちが問われている事は、日本の革命運動の敗北の根拠を問い、階級の一つの責任において克服を共有する事です。すなわち、それぞれの人民、同志、友人がそれぞれの持ち場において、主体的に、自分の口先や運動的評価ではなく、えらくも立派でもない本当の姿をせっかいする必要があると考えています。その事を通して私たちはみんながひとつの問題と結論へ向うと確信しています。

日本の革命運動の否定面をとらえる時、自分たちだけが正しいとするのではなく、すべての否定面は誰もがつくりだし、表現しているのだという視点から、共に克服していく立場にたたなければなりません。そうしなければ批判は本来の意味からはずれ、相手をけ落し、相手の否定面を自らの存在証明のためや自己正当化の道具となってしまいます。また支持することは自らの主体抜きの、実践すること抜きの、第三者的な立場となってしまいます。こうなっては今克服を問われている問題を共に克服していくことはできません。

私たちは日本階級闘争の敗北や否定面を自らの問題としてとらえかえし、不十分性を共に克服していくことにより団結をつくりだしていけると考えます。肯定面で団結しようとしても本当の団結は生れません。否定面を共有し、その克服を共にするということの中に本当の団結は生れるのです。

自らの主体的総括を通して共有する立場をつくっていくことが、あらゆる実践を批判として日本赤軍をうちきたえていきます。そして共に考え、自らの持ち場をしっかりと総括検証していく闘いは、不断に自らの革命化を通して団結を生みだしていくでしょう。

五、持ち場の闘いの主体的総括を果し、克服を共有していきましょう。

今問われている階級的責任を果していくためにあらゆる持場から主体的総括をだしあい、自己批判―批判を通して団結し、共に克服し、日本革命を勝利完成させましょう。

人民、同志、友人のみなさんが口先や形態、方法の問題ではなく、えらくも立派でもない同じ姿を問うことから開始し、総括を共有することを期待します。

私たちは今、みんな同じなのだという実感を強く持っています。みんなそんなにえらくも、立派でもありません。持ち場や革命の入口は様ざまであっても、革命の価値は必ずひとつであることを確信しています。自らをかえ、団結を求めあいましょう。

一九七七年八月九日